

乳癌の術前に偶然発見され一期的手術により摘出された左房粘液腫

末澤滝子 田中美与 平松百合子

県立宮崎病院 臨床検査科

【はじめに】

粘液腫は心臓腫瘍の中で最も頻度が高い良性腫瘍で、左房が約 75%、右房 20%、その他頻度は低い。右室や左室、弁にも発生されるとされる。まれに多発する場合もある。男女差では女性に多い。約半数の例で弁狭窄の症状を呈し、また、30～40%の例で塞栓症をきたしている。無症状の例は 20%といわれる。

【症例】 47 歳、女性

【主訴】 右乳房、右腋窩部腫瘍・疼痛

【経過】

平成 25 年 7 月より右腋窩のしこりと痛みを自覚し近医を受診。両側の乳癌の診断にて当院紹介受診。精査中 MRI にて左房内腫瘍を指摘され、心エコー図検査の依頼を受けた。経胸壁心エコー図検査では、左室壁運動障害や病的弁膜症所見は認めなかったが、左房内に心房中隔に付着し辺縁不整な約 3cm の腫瘍性病変を認めた。腫瘍による左室流入路狭窄は認めなかった。精査のための経食道エコー図検査では、卵円窩部位に広茎が確認され、表面は房状で可動性を認め、

形態的に粘液腫(27×17×25mm)が疑われた。腫瘍は単発性であり内部に血流を認めた。冠動脈造影検査では左右冠動脈に有意狭窄所見なく、腫瘍病変は造影剤により染影を認めた。乳癌は遠隔転移なく、両側乳房全摘術が予定された。心臓血管外科、乳腺外科による同時手術の方針となり、開胸、人工心肺下における心臓腫瘍摘出に引き続き乳房の切除術が行われた。

病理学的診断では、悪性所見を認めず、紡錘形、星芒状の腫瘍細胞が散在し、心臓内粘液腫と診断された。

【考察】

乳癌の術前精査にて偶然に発見に至った左房粘液腫を経験した。様々な画像診断ツールを用いることで、術前により正確な病変の性状や形態病変を把握し得ることが出来、一期的手術により乳癌・粘液腫ともに切除、摘出することができた。

連絡先：県立宮崎病院生理検査室 内線(2050)

末澤 滝子